
俺と彼女の L × D × H な関係

みずきなな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女のL×D×Hな関係

【Nコード】

N5185U

【作者名】

みずきなな

【あらすじ】

ある日、冴えないサラリーマン高橋祐介のアパートに死神が！過去に最愛の恋人を目の前で失ってしまい、この先の人生なんてどうでもいいと考えていた男『高橋祐介』。そんな彼に『死神』が取り付く。そして彼はその『死神』から死の宣告を受けてしまう。死の宣告を受けてから死んでしまうリミットの時間までの『高橋祐介』と『死神』との七日間のやり取りを書いた小説です。作者はTS好きですがこれは普通？です！軽く読んでみて下さい。完結の表記が無いのには少し理由があります。

後日談（くるのかそんな日！？）です。
※内容を見直して書き換えを予定しております。時期は未定…

まえがき

この度は『俺と彼女のL×D×Hな関係』へご興味を持って頂きありがとうございます。

この作品は下記の要素が含まれております。

内容に不快感を抱く場合がございますのでよくよくお考えの上でお読み下さい。

交通事故・人の死【残虐な描写】

ストーリー的に絡む性的描写【R15指定】

非現実的な展開

展開スピードに無理はあります。

いきなり夕方！いきなり夜！っていうのも普通です。

短期連載用に仕上げたので一気に完結へと持っていております。

その関係上、展開がかなり省略されており人物やその他の描写が

結構いい加減です。

ルビは少ないですというかほぼ無いです。

この漢字が読めない！この文章がおかしいだろ！

これで普通だと思ってください。

登場人物は私の妄想であり全てフィクションです。

一部地名が実際の地名と同じ場合があります。

死神が登場しますがこれも私の勝手な妄想による描写です。

本当はこうだろ！こんなのありえないだろ！と思う場合が多々あります。そういう小説なんだと割り切ってください。

何処かで見たとようなストーリーかもしれないですが。しかし妄想で出来たオリジナルです！

クイズ！景品なし！当てても意味なし！でも考えてみて下さい。
【L×D×H】の意味は何でしょう？二パターンの答えがあります。

答えはエピソード最後に書きます。

ヒント！LもDもHも英単語の頭文字です。

登場人物

この物語は基本的には下記の二人がメインです。
かなりのねたばれ要素を含みます。

小説を先に読むのも手ですので、もしも気になる様であれば本編を読む前にここを見るのは控えてください。

？ 高橋祐介【たかはしゆうすけ】

年齢 二十五歳

性別 男

身長 172センチ

体重 62キロ

髪の色は黒で短い。

どこにでもいるような平凡な男性。

母が一人で育ててきたが、高校の時に他界。父親は生きているが
消息不明。

そんな境遇を乗り越えて大学まで自力で行く。そして大学の入学
し始めて彼女も出来た。

俺の人生も捨てたもんじゃない。そんな事を想っていた矢先、そ
の彼女は祐介の目の前で交通事故で死んでしまう。祐介はそれっき

り人との係わり合いを、友人知人関係を持たなくなる。

本来は真面目で考えがしっかりした青年である祐介がある日死神と出会う。

？ 死神【名前は伏せておきます】

年齢 二十四歳【現実には二十四歳】

性別 女【死神だが彼女には性別が存在する】

身長 156センチ

体重 46キロ

髪は濃い青の巻き髪のロングヘアだが普段はローブの中で纏めているので外見では髪型を判断する事は不可能。瞳は黒。

見た目は小柄だが、自分の身長よりも大きな鎌を悠々と持ち上げている。

本来人間には見えない存在のはずだが、何故か祐介にはその存在を見られる。

但し、完璧に見えているのでは無く半透明に透けて見えている。

彼女は死神としての役目に苦痛を感じており、会話の出来る存在である祐介との出会い、そして秘められた過去の秘密によってそれは一際大きくなってゆく。そして…

初日 俺が死神に死の宣告を受けた

俺は名前は高橋祐介。年齢は今年で二十五歳になる。

都内の二流商社に働くごく普通のサラリーマンで独身。

平凡な日常を日々過ごし、何の目標も無く生きている人間だ。

きっとこの先も特に何も無く俺は人生を終えるのだろう。

昨日まではそう思っていた。だが…

仕事も終わり帰路についた俺は電車を降りて駅前の繁華街を抜け、アパートへと続く二車線道路の上り坂を上ってゆく。

七月に入り日も長くなったせいか、夕日が上り坂をオレンジに照らしていた。

歩道を歩いていた俺はふと横を見る。するとそこには黒いローブを身に纏い、両手ででっかい鎌を持った女性が笑顔でこちらを見ながら空中をふわふわと漂っている。

彼女は自称死神で。昨日から俺に纏わり付いている。

昨日…

七月に入ったばかりなのにとっても暑い日。

俺は仕事を終えて大学時代から借りているアパートへと戻った。

八畳一間に四畳のキッチンスペース、そしてユニットバスが付いている狭いけど家賃が安いボロアパート。

俺は大学一年からずっとここで一人暮らしをしている。これからもずっとここで一人暮らしの予定だ。

今の俺には恋人は居ないし結婚なんてするつもりも無い。

いや…俺はある事情で恋愛する権利なんて無くなったと言った方がいいのかもしれない。

そして部屋に入ると部屋まず明かりを点ける。

この部屋は東に窓が付いており、朝こそ日が差すが、夕方はまったく日が入らない。

部屋に灯りが点ると目の前には殺風景で何も無いいつの見慣れた部屋が：

違う：いつもと違う：俺の視界の中へ飛び込んで来た：

部屋の中央に立っている：体の透けた人間らしきもの：

何だ？幽霊なのか？

俺は何故か冷静だった。悲鳴を上げる事も無く冷静にその人らしき物体を見た。

よく見ればやはり人：体の透けた人間：

今、俺の部屋の中央には体の透けた女性が一人で立っている：

しかし容姿こそ人間だが、その格好や持って居る物は普通の人間らしからぬ物だった。

その女性はフード付きのダボダボした黒いローブを身に纏い、女性の身の丈以上はありそうな大きな鎌を両手で持っている。フードから少し見える髪も深い青で人間の髪の色じゃない。

そうだな：例えるならその姿はまるで死神の様だ：

女性は俺が部屋の明かりをつけてから、俺が彼女に気づいた時からずっと俺の事を見ている。

いや、俺がこの部屋に入ってから来た瞬間から俺の事を既に見ていたのかもしれない。

俺は横目でその女性を見ながら背広の上着を脱いでクローゼットへと仕舞い込んだ。

部屋の中に死神の様な格好をした透けた女性が立っているという普通だと考えられない状況。

一般的には驚いたり叫んだりする所だろう。しかし今日の俺は本当に冷静だ。

俺は上着をクローゼットに仕舞い終わるとその女性に問いかけてみる。

「君は誰だ？幽霊なのか？それとも？」

彼女は俺のその一言を聞くと驚いた表情を見せる。しかし言葉は一切発しない。

俺の言葉に反応しているのは確かな様子だ。

「君は何で俺の部屋にいるんだ？俺に何か用事なのか？」

俺は再度そう問いかけた。すると今度は困惑の表情を浮かべる。

幽霊なのか死神なのかは解らないが、彼女が意志を持った存在だという事は理解が出来た。

彼女はかなり困っている様子だが、正直俺も困っている。

何故俺のアパートに彼女が居るのか理由は聞くつもりは無いが、俺は幽霊とかそういう類はあまり好きでは無い。出来れば今すぐにも出て行って欲しいと思っていた。

彼女は困惑した表情のまま俺の瞳をじっと見つめる。俺もジッと見つめ返してみた。

「あの：もしかして私の姿が見えているのですか？」

彼女から俺に話をして来た。それも日本語でだ。

これには流石の俺も驚いた。まさか日本語で話かけてくるなんて思ってもみなかったからだ。

それも『私が見えているのですか？』という質問をしてきたのだ。その一言から考えてみると彼女は俺には自分の姿は見えていない

と思っていたと言う事になる。

しかし俺には半透明な姿だが確実に見えている。

「ああ…見えている」

俺はそう答え、冷蔵庫を開けてビールを取り出す。

「貴方は何故私が見えるのですか？」

彼女は焦りの表情でそう俺に質問をすると、ふわーと俺の方へと寄って来た。

そこで見た。彼女には足はあるのだが歩いていなかった…空中をスーと俺の所まで飛んできた。

彼女は本当に幽霊なのだろうか？

俺は何故か恐怖の前に好奇心が先行し、ビールを飲みながら彼女へと話かける。

俺はその後ずっと彼女と話しをした。

彼女の話を纏めると、俺の予想はほぼ正解で彼女は死神だった。

そして…

【俺は死の宣告を受けた】

彼女の話では俺は一週間以内かなりの確率で死ぬらしい。

死ぬ確率は日に日に上がってゆき、最終日で死ぬ可能性が一番高い。という事は、彼女の話をもとに信じるならば俺は今週末には死ぬって事になる。

彼女は俺が死ぬまでの間、又は期限である一週間が経過する迄はそばにいるという。

俺が死ななかった場合は彼女は消える。

もし俺が死んだ場合、彼女の持っているあの大きな鎌で俺の魂を刈るという。

俺は神様も仏様もましてや死神の存在なんて信じるつもりなんか無い。

しかし何故だろうか：彼女は嘘をついていない気がした。
ただ俺に彼女の姿が見えた事については彼女も原因は解らないと言っていた。

朝、俺は起きて普段通りに仕事へ行く準備をする。
そして俺は部屋を見渡した。すると昨夜ここに居たはずの死神の姿が見えない。

あれは夢だったのか？夢なら夢でもいいのだが：
俺は準備を終えるとあまり深く考えずにアパートを出た。

駅まで辿りつき満員の電車に乗り込む。
相変わらずの混み方で駅員は懸命に俺達、乗客を電車に押し込めようとする。

何とか電車に乗り込むと電車は重そうにゆっくりと駅を出る。
しかし昨日の死神とか言う女性は何だったんだろうか？
俺のそばにずっと居ると言ってたが朝には居なかった。

酔っ払っていて勘違いしたのか、それとも見えなくなってしまったのか：

まあどっちでもいいか：

俺はふと電車内の中吊り広告へ目をやる。

「あ！」

俺は反射的に声を出してしまった。周囲の乗客は何があったんだ

という表情で一斉に俺の方を見ている。

しかし今の俺にはそんな事はとっても良い事だ。

それより俺の視線の先には空中に浮かんでいる昨日の死神が見えた。

そう、あの死神の彼女が見えていたのだ。

どうやら昨日の出来事は嘘では無かったらしい：

そして今、俺の横には彼女が居るという訳だ。

二日目

二日目

俺は営業で外回りをしている。

山手線は朝ほどでは無いが昼前のこの時間でも混みあっていた。

池袋に到着すると待ってましたとばかりに一斉に人が電車へと乗り込んで来る。

そして女性が一人、子供を連れて俺の前で立ち止まった。

その女性は妊婦のようで、マタニティー服を着て吊革に掴まっている。

「どうぞ…」

俺はそう言って席を立った。

女性は驚いた表情で俺を見たが、譲ってもらった事を理解したのか「ありがとうございます」とお礼を言って席に座る。

ふと死神を見ると、死神はそんな俺のやり取りを空中でニコニコしながら見ていた。

俺は先日の夜から死神とは話をしていない。

彼女も出来るだけ俺には話しかけないようにしている。そだろうと思っっている。

昨日の彼女の話だと、彼女の声は俺以外には聞こえないという事だった。

という事は俺の声は誰にでも聞こえるのだから、彼女と公衆の面前で普通に話しをすると単なる独り言を話す危ないお兄さん。という扱いになりかねない。

俺も流石に死ぬ寸前に【高橋祐介は危ない人だった】というレテルを張られたくはない。

昨日の夜の話で俺が彼女に聞きたい事はだいたい聞いた。

もうこれ以上は彼女から何を聞くという事はするつもりはない。

本来は見えない存在なはずのだから：こちらから関わりあうべきではないだろう。

俺は取引先のある駅へと降りると改札を出てから正面の大通りを右折して坂を登る。

その途中で俺は突然見知らぬ女性にすれ違いざまに声を掛けられた。

「すみません、ここへ行きたいんですけど：教えて頂けませんか？」

会社の人間にも言われるが、俺は見た目が悪い人には見えなくて声を掛けやすいらしい。

俺は笑顔を作っている訳でも、好かれようとしている訳でも無いのだが、こういう道案内や、会社の旅行等では赤の他人に写真撮影のお願いなんかもよくされる。

まあ俺は人からの頼まれ事を拒むつもりも無いし、頼みは出来るだけ聞くようにしていた。

俺の知っている限りの情報は誰にでも教えてあげるし、写真撮影も頼まれれば喜んでやってあげる。

「ありがとうございました！」

女性は笑顔で俺にお礼をすると、駅の方角へと小走りで向かった。
行った。
ん？

何か、誰かの視線を感じる…

俺はふと右上を見ると空中で死神がニヤニヤしながら俺を見ていた。

営業も終わって会社に戻る。

俺はいつもの様にデスクワークを軽くこなして定時にタイムカードを押す。

営業なのに定時帰宅。この会社で営業にも関わらずこんな事をしているのは俺くらいだ。

この競争の社会ではやはり仕事量を増やさないと上の役職には行けない。

俺は自分で決して出来ない人間では無いと思っている。営業成績だってそこそこだ。

まあだからこそ定時帰宅を許されているというのもあるのだが…よく言われる。お前なら管理職だって目指せるのにと…

でも俺は地位や名誉なんて望んでいない。

このまま平々凡々な生活がおくれればそれでいいんだ。

だから今日も定時で上がる。

俺の勤めている会社はビルの七階にある。だから出勤や帰宅はエレベータを使う。

いつもと同じ時間にいつもの様にエレベータを待っていた。

すると後ろから女性社員が声を掛けて来た。

振り返ると総務課の女の子が一人で立っている。

「すみません…高橋さん、今荷物を運んでエレベータが使えないんです。ごめんなさい、少し待ってて貰えますか？」

彼女がそう言うと同時に目の前のエレベータの扉が開いた。中には彼女の言う通りダンボールの荷物がいっぱい入っていた。みかん箱サイズのダンボールが二十個はあるだろうか：周囲を見渡したがここには俺と社員の彼女：あとは死神しかない。

「これ、君が一人で運ぶのかい？」

俺はそう彼女に聞いた。

すると彼女はこれを全部一人で書庫まで運ぶと言う。

この量を一人で運ばせるなんて酷だろ：

俺は彼女に言った。

「俺も手伝うよ」

彼女は「え？」と言うと直ぐに「申し訳ないのでいいです」と言う。

でも俺にしてみれば早くエレベータも使えないし、女性一人でこの量を運ばせる事に嫌悪感すら感じる。

これを手伝わないで見過ごすなんて普通の男には出来ないはずだ。

【妄想】

俺は彼女と二人で書庫まで荷物を運んだ。

それにしてもこの荷物：量もあるが重量もある。

中身はきつと他の営業所の書類なのだろう。

運ぶ途中でその総務の女の子と少しだけ話をする。ナンパでは無い。この荷物の話だ。

この荷物は今日の朝に届く予定だったのだが、遅れてしまっただけになったらしい。

そして本当なら総務課の男性社員も一緒に運ぶ予定だったのだが、今日は総務課の飲み会らしくこの子以外は飲み会に行ったという事

だ。

ちなみにこの子は今日は用事で参加出来ないらしい。

まったく：それにしてもなんて低レベルな奴等なんだ：彼女にこんな仕事を押しつけずに飲み会の開始時間をずらせばいいだけの話じゃないか。

自分のやりたい事を優先させる人間なんて最低だ：つくづくそう思ってしまった。

そんなこんなで荷物は無事に運び終えた。

「高橋さん、ありがとうございました。これ：お礼です」

彼女はそう言うと言一本の冷たい缶コーヒーを俺に手渡す。

「あ、いや：お礼なんていいよ」

女はもう一度俺に「本当にありがとうございました」と笑顔で言うとう手を振りながら総務課へと戻って行った。

俺はその場で缶コーヒーを飲み干すと、エレベータで一階まで降りてそして帰路についた。

帰りの電車の中：俺の目の前ではニコニコしながら死神が浮かんでいる。

こいつ：今日はずっとニコニコしながら俺を見ている：くそ：何か恥ずかしい気分になるな。

アパートに到着。

俺は何時もの様に冷蔵庫からビールを取り出す。

そしてグツと飲み干した。

やっぱ暑い日のビールはうまい！

もう一本ビールを取り出して窓際へと座る。

そこへ死神がふわふわとやって来た。

「ねえ…私とお話ませんか？」

彼女はそう言うのと笑顔で俺を瞳を見つめる。

一瞬その瞳を見てドキッとしてしまった…

死神と言えど女性に見つめられるとやはりドキッとする。それは男の性ゆえにか…

まあ俺は別に彼女と話をする分には困る事は無い…

「いいけど…」

俺がそう返事をするとな彼女は楽しそうに話を始めた。

しかし、こんなに明るい死神でいいのだろうか？

本当にこいつは死神なのか？

三日目と四日目

三日目の夕方

アパートへと無事に帰宅を果たす。

俺はもちろんまだ死んでいない。

しかし…あと四日間で本当に死ぬのだろうか？そんな疑問が湧いてくるくらいに平和だ。

それにしても昨日から彼女はすごくお喋りになった。

俺も俺で彼女の話に耳を傾けてしまうのもあってとにかく良く話をしてくる。

感情を表に出して話す彼女の姿を見ると本当に死神だとはとても信じられない気分になる。

そしてアパートに到着すると待ってましたとばかりに彼女は話を始める。

今日は今までに死神になってから経験してきた色々な話を話してきた。

「それで最後にその人が言ったんです。まだ生きたいの！生き返りたいの！って…でも私は死神だし、生かすのは私の役目じゃないんです。それに人の運命を変えるなんて私には出来ないんです」

彼女はシングルマザーの母親の担当になった時の話をした。

死神は本来その死神の担当の人間が死ぬか、死ぬ寸前になって初めて人間の前に現れるらしい。

いや俺と同じく一週間前には死ぬであろう人間に取り憑くという事なので、その人間に見えるのが寸前か死んでからという事になる。そしてそのシングルマザーの母親も病気で死んでしまい、初めて

彼女と出会う事になる。

その母親は子供を残してまだ死にたくないと泣いて彼女へと頼み込んだらしい：

彼女も出来る事なら死んで欲しくはなかったとすごく悲しそうな顔をしていた。

彼女は彼女なりに苦勞としているんだな：俺は溜息をつく彼女を見てそう思った。

何故だろうか：俺は彼女の事がもっと知りたいと思い出している。彼女自身に興味が沸いていた。

「そういや：死神、お前は何歳なんだ？百歳なのか千歳なのか？それとももっと上なのか？それになんで人間の姿なんだ？それも女なんだ？死神と言えば骸骨じゃないのか？あと、死神には名前は無いのか？ずっと死神って呼ぶのもどうかと思うんだ」

俺は彼女の事を知りたくなり、質問を矢継ぎ早にぶつけた。

すると彼女は嫌がる様子も無く俺の質問に対しても丁寧な答えを返してくれた。

まず教えてもらったのは、彼女の実年齢が二十四歳という事。まずここで俺は驚いた。

話によれば何百歳という死神もちろん存在しているらしい。

しかしある一定時期で世代が入れ替わるとか転生するとか、転生後は前の記憶は一切消えるとか、私は転生したばかりなんだとか、そういう事を詳しく説明してくれた。

よく解らないが彼女が俺の一つ下だという事は事実だ。

年下の死神なんてかなりレアケースかもしれない：俺は何故か嬉しくなった。

人間の姿の問題だが、これは彼女の意志ではないという事だ。たまたま生まれてみたら人間の女性の姿で、そのまま死神になっ

たらしい。いや、なっていたらしい。

性別も話し方もそして体の構造までもがすべてが人間の女性と同じだというからまたびっくりだ。

という事は彼女は人間の女性と同じで：

俺の視線は無意識に彼女の上半身から下半身へと移る：

っと：俺は何処を見てるんだ：相手は死神なのに：

あとは、他には骸骨はもちろん、動物等の姿の死神も存在しているという話も聞いた。

「祐介さんは私じゃ不満ですか？」

彼女は突然そんな事を言う。

不満も何も死神に取り憑かれた時点で普通は不満だろう：

しかしどうせ取り憑かれるのなら骸骨や動物の死神よりも彼女の方がいい。

まあ：彼女でよかったという事にしておこう。

最後の名前についてだが、これは教えてくれなかった。

彼女は俺にこう言った。

「死神は他人には名前を教えては駄目なんです。教えると死神ではいられなくなるのです」

そういう事なら俺は追求するのは止めた。

どうせ一週間の付き合いだ。彼女の名前を知ったからと言ってもどうこうなる訳でも無い。

最後に、この三日の間に解った事実がある。彼女には触れる事が出来ないという事だ。

そして彼女は歩くという事をしない。物質はすべてすり抜ける。だが、光だけはちゃんと彼女を照らす。

というか死神が光を浴びてもよかったという事は俺も知らなかった。

ちなみに彼女には影が無い。なんて不思議な存在なのであろうか…

四日目の夕方

俺は会社からアパートへと戻るといつものように缶ビールを冷蔵庫から取り出す。

今日まで特に危険な事も無く、俺は本当に死ぬ可能性があるのかと疑う程に平和な日々が続いている。

彼女はというと、相変わらず笑顔で俺の周囲をふわふわと漂っている。

最近になって思った。空中を飛ぶなんて死神の癖に楽をしすぎだと。

しかしここまで周囲の人間は誰一人として彼女の存在に気づかない。

何故だろうか？ 完全では無いにしろ俺には彼女の姿が見えるし、声も聞こえる。

という事は俺の他にもそういう人間が居てもおかしくは無い。

だが、そういう人間にはまったく遭遇しなかった。

そうか…本来死神の姿は死んでから見える…

もしかするとこの世界に俺だけなのだろうか？ 彼女が見えるのは？

そんな事を考えながら俺は窓辺に腰掛け、窓を開けて外を眺める。今日も良い天気で夕日が新都心のビル群をオレンジ色に染めている。

最近この窓から見える景色が妙に綺麗だ…

「祐介さん：祐介さんって思ったよりも優しくって、思いやりのある方なんですネ」

俺の真上に漂う彼女が唐突にそんな事を言った。

なんて死神らしくない言葉だ：俺は呆れた表情で彼女を見上げる。

「勘違いだろ？俺は別に優しくも無いし、思いやりも無い」

俺はそう言うのと彼女は少しムツとした表情になった。

「勘違いじゃないです！電車で妊婦の方に席を譲ったり、困った人に道を教えてあげたり、会社の女の子にだって優しいし：死神の私とだって普通に話しをしてくれる：思いやりの心、優しい心をいっぱい持っているじゃないですか：」

「それで？それが何なんだ？どうせ死ぬのにそんな事はどうでもいいだろ」

「そんな言い方しないで下さい：」

「どうでもいいから、どうでもいいって言ってるんだよ！」

俺は思わず強い口調で彼女に向かってそう言った。

すると彼女はさらにムツとした表情になり、そのまま俺に向かって下降して来る。

そして俺の顔に彼女の顔が急接近した！

「ちょ、ちょっと待て！」

俺は慌てて両手を突き出して？ いや、突き上げて俺に向かってくる彼女を止めようとした。

しかし彼女は俺の両手を、そして体をスーと突き抜けるとそのまま床下と潜っていった…

そ、そうか…彼女には触れないんだった…すこし焦った。
俺の心臓は緊張からかドキドキと鼓動をしている。

「ふう…」

俺は深呼吸をすると彼女が消えていった床を見る。
よく考えればここは二階なんだが…彼女は何処いったんだろうか？
ちよつと強く言いすぎただろうか…

十二時を過ぎても彼女は帰って来ない。
初めて彼女はこんなに長時間俺のそばから離れた。
いいのか？ そばに居なくても…

結局、五日目の朝を迎えても彼女は戻って来なかった。
一体何処へ行ったのだろうか…

五日目の夜十一時

五日目の夜十一時

彼女は結局一日戻って来なかった。

もしかして…俺は死なないのだろうか？

もしかして…彼女は役目を終えて戻ってしまったのか？

まさか、最後があんな形で？

そんな事…無いだろ…彼女は確かに言ったはずだ、七日間是一緒だと…

俺は彼女が居なくなれば死なくて済むという気持ちよりも、彼女が居ない寂しさ、彼女にもう一度逢いたいというの気持ちの方が何故か勝っていた。

しかし、本当に彼女が俺の前から消えたとするならば、それはそれで良かったのかもしれない。

俺は彼女の事が気になり初めている…ってそれは何だ？俺は馬鹿か…相手は死神だぞ…

俺は布団に入り下らない事を考えながら横になっていた。

ん？何かの…気配が…

気配を感じてからすぐに目の前、いや、俺の真上にいきなり彼女が現れた。

一瞬だが俺は心の奥底で喜びを感じていた…その反面、おい…喜んでどうするんだよ…死神が戻ってきてきて喜ぶなよ馬鹿…冷静な俺がそう言う。

俺は気持ちを押さえ込んで言った。

「何だ帰って来たのか。もう戻って来ないかと思ってたのに」

俺が冷たく言ったのにも関わらず、彼女はとても優しい声で言った。

「祐介さん、皆さん感謝してましたよ：貴方の思いやりに、優しさに：だから：どうでも良いなんて思わないで下さい：」

何だ？ 丸一日も俺の前から姿を消したのはそんな事を調べる為だったのか？

何が無駄な事をして来てるんだ：死神の癖に：

「感謝？ 下らない：俺はそんなものは望んでいない。本当にどうでもいいんだ！ あと、死神の癖にそんな事を調べてどうするんだ？ 死ぬ人間にそんな事を教えるのも無意味だろ」

俺は強めの口調でそう言うのと体を横へと向けた。

「祐介さん：貴方が望んでいなくてもいいんです。でも貴方の行動は皆さんに感謝されてたって：どうでもいい事じゃなかったって：ただそれを伝えたかっただけです：」

彼女はそう言うのと黙り込んだ：

二人が無言のまま数分が経過する。

窓からはたまに外の道を通る車のライトが入り込み室内を照らす。そして押しボタン信号の黄色い点灯も部屋の中をチカチカと照らしていた。

更に数分が経過：

俺の目も慣れてきたのか先ほどまで真っ暗だった部屋が信号の光

で薄っすらとだが見える。

視線だけを真上を漂う彼女へと向ける。

薄暗い部屋の真ん中。点滅する信号の光で照らされた彼女…

彼女は寂しそうな表情で空中に浮かんでいた。

それから更に数分が経過…

彼女が口を開く。

「そういえば…祐介さんは一週間以内かなりの確立で死ぬって私に言われて…怖くはなかったのですか？」

彼女は突然そんな質問をしてきた。

怖いか…俺は考えてみる…死んだら怖いのか？

そうだな…死ぬのが怖くない人間なんていないだろう…

俺だって死にたいなんて思って今まで生きてきた訳じゃない…

でも…今ここで俺が生きている事は奇跡…俺は生かして貰った人間なんだ。

死ぬのが運命ならばそれはそれで受け止めるしかないだろ…

そうだよ、本当は俺はもう死んでいたのかもしれないんだ…いや、

死んでいたはずだったんだ…

もしかすると死ねば里美の居る場所へ行けるかもしれないな…

そうしたら謝らないと…里美に…

その時の俺の脳裏には、ある事故が思い出されていた。

あの時…そう、十九歳の夏の日だった。大学に入学してすぐの春に初めて彼女が出来た。

名前は里美…元気で活発で見てるだけでも楽しい女の子だった。付き合い初めて三ヶ月目の記念の日、初めて里美が俺の家へ泊まりに来る事になった。

その当日、俺は胸を躍らせながら里美の到着を待つ。

夕方になって俺は里美の来る時間に合わせてアパートの前にある押しボタン信号の横に立っていた。

すると対向車線の歩道の少し下った所に里美の姿が見る。

里美は俺に気がついて笑顔で手を振っていた。

左手には泊まりの着替えでも入っているのだろうか？ バッグを持っていた。

信号のボタンを押す。すると信号はすぐに青に変わる。

俺は里美を迎えに横断歩道を小走りで渡り始めた。

そして二車線道路の中央に差し掛かった時、真横から居眠り運転のトラックが信号無視して突っ込んで来る。

俺の体は突っ込んでくるトラック直視した瞬間、恐怖で体が硬直した。

『死ぬ！』と思った。

俺は咄嗟に目を閉じた！その時！

体が誰かに突き飛ばされた！そして俺の体は道路の反対車線へと転がる。

その瞬間！ドン！ゴシュ！という、何かが激しくぶつかった音と潰れるような音が同時に俺の耳へと入ってきた！

目をゆっくりと開く。

騒然となった横断歩道！

俺は我を取り戻すと慌てて辺りを見渡す。何があった！？何で俺は生きてる！？

見渡していた俺の視界に里美のバックが見える。血で真っ赤に染まったバック！？

俺はバックが転がるさらに先を見た。

すると坂道を数十メートル下った先の道路の真ん中に血まみれになった里美が倒れている！

慌てて俺は里美に駆け寄る！しかし…里美は…

即死だった…

そうだ…彼女は俺の身代わりになって死んだ…

だから俺も…

「駄目！駄目ですよ！死を受け入れようなんて思っちゃ！」

俺は何も口に出して話していないのに彼女は俺の考えをまるで読み取ったかのように震えた声で怒鳴る。

彼女は死神だ、俺の心を読まれていたとしても不思議はない。俺はそう思い体を起こして彼女を見た。

「知ってるんだろ？俺の命は本当は六年前の夏に無くなっていたはずだったんだ…そうだよ、あの時に俺が死ぬべきだったんだ…」

俺がそう言うのと彼女の表情は一層険しく変化してゆく。

「祐介さん…彼女の為を思うのならば…死んでもいいやなんて…そう思っては駄目です！」

彼女は死神の癖に死神らしからぬ事を言っている。

しかし彼女は俺が死ぬ可能性があるから俺の傍にいる。すごく矛盾している…

「俺は運命で死ぬんだろ？だったら死を受け入れる必要があるんじゃないのか？それともあんたに俺の運命を変える事が出来るのか？そんな事をやってもいいのか？」

彼女は悔しそうな表情で小刻みに震えながら空中を漂っている。

そして彼女は聞こえるか聞こえないという程に小さな声で俺に言った。

「私は死神失格です…私は…貴方に死んで欲しくないと思っています」

今にも泣き出しそうな震える彼女の声…

く…何だこれは…彼女が苦しむ姿を見て俺も辛くなった。

そして確信する。駄目だ…もうこれ以上は…彼女と関わりあうべきじゃない…

「俺に構うな！」

俺は彼女に向かって大声で感情的に怒鳴ると布団を被った。

そしてその夜…俺は初めて彼女の泣き声を聞いた…

六日目の夜

彼女が来てから六日目の夜…

明日で丁度一週間だ。という事は明日で彼女ともお別れか…

正直、昨日の夜から俺は彼女とまったく話をしていない。

彼女は死神なのに俺を優しい思いやりのある人間だと言う。

そして俺に対して死んで欲しくないと言う。本当に彼女は死神失格だ…

このまま彼女は俺と話をしていると…俺と接していると…きつと死神として駄目になるだろう。

俺が死ぬときつと悲しむのだろう…

彼女の為にも俺の為にも…本当にもう彼女には関わり合わない。すぐにでも彼女に嫌われない。

本当に嫌われて…そして俺は孤独に死にたい…

俺は風呂を出ると冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

そして一気にぐっと飲み干す。そしてもう一本…

俺はビールを片手に窓際へと移動した。

彼女は部屋の隅に体育座りで俺を見ている。彼女との会話は一切無い…

真夜中…時計の針は十二時を回った。

遂に最後の日がやって来た。

眠れない…俺は布団からでるとカーテンを開ける。

窓から見える街は静まり返り車も通っていない。

黄色の点滅信号だけが何時もの様に周囲と部屋の中を明るく照ら

す。

そして真っ暗な闇の中で遠くに見える副都心のビル群の明かりが妙に綺麗に見えた。

もしかすると今日中に死ぬ俺に最後の夜景を楽しませてくれているのかもしれない。

「祐介さん…」

突然彼女の声が後ろから聞こえた。

そうだった：死神である彼女は寝ないんだったな：

申し訳なさそうな声の調子からすると俺にまだ気を使っているのか？ 死神の癖に：

今の彼女に俺が出来る事は：そうだな、それは少しでも彼女に嫌われて：彼女が俺の事をどうでもいいと思って貰えるようにするか：

「何だ。俺はお前に用事なんて無い」

俺は少しでも嫌われる様に冷たくそう言った。

すると彼女は床に足を着き直立すると大きな鎌の柄をギュツと握った。

鎌に付いている大きな刃が怪しい光を放っている。

「貴方は今日中に死ぬかもしれませんが：何か思い残した事などはありませんか」

彼女は真面目な表情で俺に向かってそう言った。

今まで見せなかった彼女の冷たい表情、死神らしい言動。

俺は少しは嫌われる事が出来たのだろうか：

「さあ、この世に未練を残さない為にも言ってお貰えませんか」

彼女は感情の籠っていない口調で俺にそう言った。

未練か…今の俺にはそんなものは正直どうでもいいな…

しかし、彼女には無理難題を言ってもっと嫌われておかないといけない。

俺は自分に言い聞かせる。

祐介、彼女が可愛そうだとか思うなよ…自分の為、そして彼女の為なんだぞ…

言っておやれ！お前が嫌われるような事をな！

「お前は知ってるかもしれないが、俺は経験が無い。里美が死んでから彼女なんて作るつもりも無かったし、里美が俺の全てだった。そうだな、今日で死ぬんだったら、里美の代わりに俺と寝てくれよ」

彼女は大きな鎌の柄の部分をグッと握りしめて自分の胸に押し当てた。そして険しい表情で俺を睨む。

そりゃそうだろうな？俺は彼女にとんでも無い事をお願いしているんだからな…

死神である彼女に俺は触れる事が出来ない。

触ろうとしても触れない空気のような存在なんだ。

そして彼女は俺の本当の彼女でも何でも無い。

ましてや里美の代わりと言われていい気がする訳も無い。

絶対に無理な願いなんだ。これで確実に嫌われたかな…

「冗談だ。本当の俺はそういう男なんだ。解っただろ？もう俺の相手なんてするな！俺の最後の願いは俺を一人にして欲しいって事だ！」

俺はそう言って今日買ってきたタバコを口に咥える。

そしてライターを取り出し火をつけようとする彼女が言った。

「祐介さん…タバコ吸わないでしょ…無理はしないで下さい」

あんな酷い事を言った俺に対する彼女に優しさに苛立った。

死神なのに何時までも俺に優しい彼女に怒りすら覚えた。

「今日中に俺は死ぬかもしれないんだ！じゃあ俺の勝手にさせろよ！お前は俺に命令する権利でもあるのかよ！可愛そうだとかそういう一時的な感情で優しくするんじゃないよ！」

俺は感情的に、しかし心の底にある本当に自分の気持ちとは裏腹に彼女に向かって怒鳴った。

本当は彼女に感謝していた…今日まで気遣ってくれる彼女に癒されていた。

そして本当の俺は彼女の事がやっぱり…

俺はタバコに火をつけると煙を吸い込む。

久々のタバコに「ごほごほ」っと咽る。

その時だった。俺の背中から何か暖かい感触が体に伝わった。

そして彼女の手が俺を包み込む…

「え？」

俺は慌てて後ろを振り返った。すると彼女が顔を赤らめて俺に抱きついていた。

それも…姿が半透明じゃ無い…俺に彼女の体が触れていた…

「私は里美さんの代わりになれません…だけど…祐介さん、こんな私でもいいのなら…」

俺はその一言に動揺してタバコを落とした。

彼女は落ちたタバコをゆっくりと左手で拾い上げるとぐっと握り締める。

手を広げると手に平からタバコが消えていた：

俺は驚いた。タバコが消えた事にもだが、嫌われようとして言った俺の一言を叶えようとする彼女の姿に：

そして彼女は確かに言った：「こんな私でもいいのなら：」と：それは俺に抱かれてもいいって事なのか？そうだとすると馬鹿だ：彼女は本当に馬鹿だ：

俺は何て馬鹿なお願いをしているんだ：これじゃ彼女を余計に傷つけただけじゃないか！

俺は：俺はどうすれないんだ：

俺は君を傷つけたくないんだ：駄目だ！こんなじゃ！

「待ってくれ！あれは冗談なんだ：俺は君を傷つけたくないんだ！今日中に死ぬかもしれない人間に死神である君が：」

そこまで言った所で彼女は俺の口を右手で優しく塞いだ。

俺はそれ以上何も言えなくなった。

彼女は俺の真横へ来ると俺の顔を両手で優しく持つ。

そして言った。

「祐介さん：私は死神失格です：」

そして彼女の唇がゆっくりと俺の唇と重なった：

成り行きという訳ではない：俺は何時の間にか彼女に恋をしていた：それは事実：

しかしそれは禁断の恋。決して求めてはいけない恋。

俺は自分の気持ちを中心に奥へと押し込んでいた。

嫌われよう嫌われようと思う度にその気持ちが俺を苦しめた。

悔しいけど胸の高鳴りが押さえられない…

俺はキスをしながら彼女をぎゅっと抱きしめた…

まさか…死神である彼女と…

彼女は大きな鎌を床へと置くとゆっくりとローブを脱ぎ始めた。

俺は我を疑う…

ばさりとローブを床へと脱ぎ捨てた彼女…

深く青い胸元あたりまである彼女の髪がふわっと広がる…

綺麗だった…彼女はとても…まるで女神のように…

そんな彼女を目の前にして俺は考えていた。

俺には経験がまったく無い…これは本当だ。

そんな俺に、死ぬかもしれない俺に身を捧げようとする彼女…俺は罪悪感を覚えた。

俺は思い切って言う。

「今からでも止めていいんだ…俺は君に出逢えただけでも満足なんだ…本気でこんな事を望んでいた訳じゃない…君も本当は望んでいないんじゃないのか…だったら…」

すると彼女はニコリと微笑む。

駄目だ…死神なのに俺にとってには天使にしか見えない。

「これは私のお願いなんです…貴方を好きになってしまった私の…だからお願いです…私の初めてを貴方に…」

彼女は顔を赤らめながらそう言う。

そして裸のまま俺に抱きついた。

俺は：もう自分の理性を抑えられなくなった：

深夜：

俺の横には彼女が居る。

死神である彼女と遂に関係を持った：

「後悔してないのか？」

俺は思わずそう聞いた。

彼女は一度笑顔を見せると突然涙を流し始めた。

俺は動揺した。やはり後悔しているのかと？

すると彼女は俺の表情が変化したのに気づいたのだろうか、泣きながら「違う：後悔してないよ：私は祐介さんと一つになれてとても嬉しかった：でも：」と言った所で言葉に詰まる。

「でも：」って：俺に何か言いたい事でもあるのだろうか：しかし彼女は結局それ以上は話をしてくれなかった。

最終日

翌朝

目が覚めると彼女は普段と同じ黒いローブ姿に大きな鎌を持って空中に漂っている。

そして体は半透明に戻っていた。

「おはよう…」

俺がそう言っていると彼女はニコリと微笑みながら「おはよう」っと言
い返してくれた。

そつと彼女に手を伸ばす。しかし昨日の事が嘘だったかのように
もう彼女には触れられない。

昨日は何故俺は彼女に触れる事が出来たのだろうか…理由なんて
聞かないでおこう…彼女が今日も居てくれるだけで十分じゃないか…

何だろう…昨日まで思ってもいなかった気持ちが俺の心に現れて
いる…

『死にたくない』という気持ち…

しかし俺は自分に言い聞かせた。もしも俺が死んだとしてもそれ
は運命だ。受け入れろと…彼女は俺の願いをちゃんと叶えてくれた
んだ…思い残す事なんて無いだろ？

俺は気を張って会社へと向かった。

最終日の夕方

一日が終わるまであと数時間：

このまま行けば俺はもしかすると死なないで済むかもしれない。

俺は何時の間にかそんな事を考えるようになっていた。

彼女の方を見ると彼女は俺を優しい笑顔でずっと見てくれている。その笑顔を見ながら俺は考えた。

もしも俺が生き延びたとしたら？彼女は？

そうだ：彼女とはどちらにせよ一緒に居られないんだ。彼女は死神なんだ：

でも：生きていればまた逢えるかもしれないよな：

「今日もうすぐ終わりだな」

俺は独り言のようにそう言うとな彼女は再びニコリと微笑んでくれた。

すると頭の中に語りかけてくる声が：

『このまま終わってほしい：貴方に生きて欲しいな』

何だ？これは？俺は彼女の顔を見た。すると彼女は右手でブイサインを作っている。

『これは思念です。最後まで気を抜かないでね』

彼女の思念？テレパシーのようなものなのか？

そうか：人が多いから俺に直接語りかけてきてるのか：

って待てよ？今朝まで話が出来たんだし、彼女の言葉は俺にしか聞こえないはずじゃ？

俺は慌てて彼女を見た。すると薄くなっている！彼女がどんどん消えている！いや、俺から見えなくなっているのか！？

そうだ：あと数時間で彼女は俺の目の前から消えるんだ：

俺が死んでも生きててもあと数時間で彼女は消えるんだ：もしかしてもう会話も出来ないのか！？
すると俺の焦る表情を見てなのかまた思念が飛んで来る。

『もう会話は出来ません。でもこうしてまだ思念は送れます』

もう会話が出来ない：俺は彼女と距離が開いてゆくを感じ胸が痛んだ。

でも仕方ない事なんだ。俺は自分に納得させて上り坂を上っていく。

そして遂にアパートの前の押しボタン信号へ到着した。

ここを横断すればアパートだ。部屋に入れば死ぬ可能性は格段に低くなるかもしれない。

俺は信号のボタンを押して信号が変わるのを待った。

ふと周囲を見渡すと俺の右には小学生の女の子、そして向こうには母親らしき人が見える。

そして信号は青へと変わる。俺とその女の子は左右を確認してから渡り始めた。

するとキキキーというブレーキ音が聞こえて、坂の上から一台のトラックがすごい勢いでこちらに向かって来る！

あのスピードだとまず間違い無く信号無視をしてここに突っ込んでくる！

だが俺は走って戻れば避けられる位置にいる！よし！

「車が来るから慌てないで歩道まで戻って！」

俺は女の子にそう言うと言った女の子は走って歩道へと戻って行った。これで大丈夫かと思った時！

女の子の母親が女の子が飛び出したと思ったのか車道へ飛び出している！

そしてトラックはその母親へ向かって進んでくる！

あの時と同じ!?

あの時の俺と同じであの子のお母さんは恐怖で硬直して動けなくなっているのか!?

後ろを振り返ると女の子が母親に向かって叫んでいる。

「ママ! ママ!」

俺は覚悟を決めた。

その時、俺の脳裏に思念が飛び込んで来た。

『駄目! 行ったら死んじゃう! お願いだからやめて!』

彼女からだった: 確かにここで行けなかったら俺は死なないかもしれない。

けれど: 俺には両親は居ない。母は既に他界し、父親は行方知れず。

恋人の里美も死んでしまっていない:

友人知人も少なく、俺が死んで困る奴なんて居ない。

この子にもあの母親にも未来がある。大事な誰かを失なった悲しみは俺が良く知っている。

俺が目の前で死ぬ事もあの子やあの母親にとっては辛い事なのかもしれない。

でも: 大事な家族を目の前で失う方がもっと辛いんだ。

俺は女の子の安全を確認すると勢い良くその子の母親へ向かって飛び出した!

そして俺達は…

まだ間に合う！突き飛ばせば…間に合うぞ！
その時だった！俺の体を誰かが引っぱった！

「え？」

俺は勢いを失いその場に立ち竦む。すると俺の横を彼女が裸足で走り抜けた。

え？彼女が走ってる？何で彼女が…

そして彼女の姿は俺にハッキリと見えていた。まさか！

「おい止まれ！」

俺は彼女に向かって怒鳴った。

しかし彼女は止まる事はなく母親へと向かって走る。

「止まれえ！！！」

俺はもう一度大声で彼女に向かって怒鳴る。

すると彼女は俺の方を少しだけ振り向き笑顔を浮かべた。

そしてそのまま立ち竦む母親を両手で突き飛ばす！

その瞬間！ドシャ！というリングが潰れるような音が聞こえたかと思うと、同時に急ブレーキの音が鳴り響いた。

俺は一瞬混乱したが、すぐに彼女が俺の代わりに母親を突き飛ばしたとわかった。

見れば母親も子供も無事だ。

母親は少し怪我をしている様子だが、周囲の人達が手当をしてい

る。

俺はすぐにあの不愉快な音を思い出す。ドシャという何か潰れるような音…

その音は六年前に聞いたあの音と頭の中でリンクする。

彼女は!?

俺は道路に止まっているトラックを見る。

血こそついていないが、ベコリとフロント部分が凹んでいる。

俺は焦り、慌てて彼女を捜した。

しかし彼女の姿は見えない…

居ない!居ない!居ない!何処だ!

『祐介…さ…』

思念!彼女の!?!彼女の思念が微かにだが聞こえた!

俺は直感で数メートル先の道路脇の垣根へと走る。

おれは愕然とした…

そこには体がほぼ消えかかった彼女が居た…

それも…右腕や右足が信じられない方向へと曲がっている。

顔は真っ青になり…傷口からは血が大量に流れ出ている…

ぼたぼたと流れ落ちる血は地面につく前に消えてなくなる…不思議な光景…

『ゆ…祐介…さん…』

彼女は涙を浮かべ、そして震える左手を俺へと伸ばす。

俺も彼女の左手に懸命に触れようと手を伸ばした。

しかし…俺の手はいとも簡単に彼女の左手をすり抜けた…

どうして…どうして触れられないんだよ！彼女がこんなに苦しんでいるのに！

きっと周囲の人には見えないだろう彼女に向かって俺は叫ぶ。

「おい！お前は死神だろ！死神が人を助けてどうするんだよ…俺の代わりに…何やってんだよ…」

消えかかった彼女は僅かにだか視線を俺に向けた。

『ご…めん…ね…私…』

何で謝るんだよ…何で…

『隠して…た…六年前…里美さん…の…魂を…刈ったのは…私…』

え？何だ？どういう事なんだ？里美の魂を刈ったって…

あの時の事故は俺が死ぬんじゃない？無かったのか？

元々里美が死ぬ運命だったて事なのか！？

じゃあ、あの時から死神である彼女は俺の事を前から知っていたのか？

でも今はそんな事を考えている場合じゃない！

「そんな事は今はどうでもいい！助かるんだろ？俺の代わりに死ぬなんてないよな？死神は死なないんだよな…」

俺の声は震え、そして目から自然と涙が溢れ出てくるのが解る。

そして涙は消えかかった彼女をすり抜けて地面へと落ちた…

『私…は…役目とはいえ…祐介さんの…目の前で…貴方の…大事な

人の…魂を…ゴホ…ゴホ…』

彼女は咳き込みながら大量に吐血し、そして体が急激に透けてゆく。

「いい、いいからもう話すな！」

ボタボタと流れ落ちる俺の涙が彼女の血の代わりに地面を濡らしていた。

俺は…どうすればいいんだ…彼女を助けるには…

神様…俺は神様なんて信じていない…でも今だけは信じるから…
こいつは死神だけど…助けてやってくれ！お願いだ…神様…

『ごめん…ね…私…や…やっぱり…死神…失格……………』

彼女はそこまで話すとゆっくりと目を閉じてガクリと頭を垂らした。

「おい！死神！目を開けろ！開けてくれよ…」

力を失った彼女には俺の叫びは既に聞こえていない様子だった…
そして彼女はまるで線香花火の最後の様に光輝くと俺の目の前から完全に消えた…

「おい！消えるな！出てきてくれ！出てきてくれよ…う…うう…」

俺はがっくりと膝をつきずっとその場で泣き崩れていた…

神様の馬鹿野郎…神様なんてやっぱり信じねえ…くそ…くそー！
戻って来てくれよ…

七日目が終わる…

俺は生きている…

しかし彼女は結局…

どうしてだ…

どうして彼女はあの時に人になったんだ…

死神の癖に俺を…あの母親を助けたんだ…

それじゃ…俺を助けたて死んだ里美と同じじゃねーかよ…

だが里美とは異なる事がある…

それは…里美は運命で死んだ…しかし俺は…運命では死ななかった…

俺は窓から景色を見ている…

本当は見る事の出来ないはずだった夜景…

そして俺は彼女の居ない部屋を振り返った。

おい死神…お前が俺を助けたのは俺から里美を奪った…里美の魂を刈った償いなのか…

だが里美は運命で死んだろ…死神の責任じゃないんだろ？

それに…今回は俺が運命で死ぬべきだったんだろ…

なのにどうしてだよ…

そんなに俺に生きて欲しかったのか？

そうだとすれば、俺は…

お前にこそ生きて欲しかったよ…

終わり

そして俺達は…（後書き）

えびろーぐへ続きます。

えびろーぐ？ (前書き)

高橋祐介は生きている…彼女の分まで…

えびろーぐ？

あれから一年が過ぎた：

あの事故は車に人を撥ねた形跡があるにも関わらず被害者なしという不思議な事故として処理された。

俺は真実を知っているが、警察に言った所で信じて貰えるはずな
んか無い：

そう言えば今日だった：丁度一年前の今日だ：彼女が俺の部屋に
やって来たのは：

俺はアパートの前にある押しボタン信号を渡りながら一年前の出
来事を思い出していた。

今日みたいな暑い日だった：俺が部屋に入って電気を点けると彼
女が居たんだ：

もしかして：

俺は淡い期待を持って玄関ドアを開くとアパートの中を覗き込ん
だ。

しかしそこには誰も居ない：当たり前だよな：居るはずない：

「ふう：」

俺は深く溜息をついた：

「そんな深い溜息をついてると幸せが逃げますよ」

突然、俺の真後ろから聞き覚えのある女性の声が！？

俺は慌てて後ろを振り向いた！すると：そこには：

「私、死神…失格みたいです…」

そこには彼女が立っていた！

深く青い髪が風に靡き、薄いブラウンのフレアワンピースを身にまとった可愛い普通の女の子の格好をしている彼女が立っている。

「ほ、本当に…死神なのか？」

声も、その黒く輝く瞳も、深く青い髪も、全て間違いなく彼女だと証明している。

しかし俺の中に信じられないという気持ちが押し寄せていた。夢か幻か？本当に彼女なのか？彼女は死んだのでは？黒いローブにでっかい鎌も持っていないし…

色々な想像・妄想がこみ上げる。しかしそんな考えも彼女の一言で一蹴される。

「はい、私です」

彼女はそう返事をするにニコリと微笑んだ。

その深く青い綺麗なロングヘアに天使のような笑顔の彼女…俺は咄嗟に彼女を手繰り寄せると両手でギュッと抱きしめた。

「ゆ、祐介さん！？」

彼女もいきなり抱きしめられて驚いていたが、俺をそっと抱きしめ返してくれた。

「生きた…良かった…本当に良かった…俺…マジで嬉しい…すごく嬉しい…」

俺は自分の声が震え、そして目から自然に涙が溢れ落ちるのが解った。

「祐介さん…泣かないで…ほら、私はちゃんと生きてますから…」

彼女はそう言って俺の涙をハンカチで拭き取ってくれた。

「ごめん…俺って本当は泣き虫だったのかもしれない…」

俺がそう言っていると彼女は笑顔で言った。

「そこが祐介さんの良い所なんですよ」

俺は彼女と一緒にアパートの部屋の中へと入る。

彼女にとっては久しぶりのアパートだ。

そして彼女はキョロキョロと部屋中を見渡した。

「何も変わってないですね…」

彼女はシミジミとそう言った。

「ああ…あの時のままだよ…」

俺はそう答えた。そして二人で畳の上へ座った…

何故だろうか…こんなに嬉しいのに…話したい事もいっぱいあるはずなのに…言葉が出ない…何を言っているのか解らない…

俺が無言で俯いていると、彼女は俺が話し出せない事を察したかのように話を始めた。

「祐介さん。私は死神として重大なミスを犯しました。それは貴方の魂をちゃんと刈り取って来なかったという事と、あの事故に関わった人間の人生、そして運命を狂わせたという事です」

「死神の長は、瀕死だった私を治療し、そして回復するのを待つてから私に重い罰則を与えられました」

彼女はすごく真剣な顔で話しをしていた。何かの覚悟を決めたかのように…

覚悟…彼女は何を覚悟しているのだろうか…

俺にはさっき彼女の言った言葉『懲罰』、その言葉からは悪い事しか浮かんで来ない。

そう、それはこのまま彼女との別れ…しかしその考えは再び一蹴される。

「そんなに不安そうな顔をしないで下さい。罰則とは私を人間にして魂を刈り取れなかった貴方の傍に置き…そして死ぬまで監視させる事なんです」

「え!？」

俺は何かとんでも無い事を聞いた気がした。

俺は死ぬまで彼女に監視される？

「祐介さん…私は貴方の大事な恋人だった里美さんの命を刈った死神です…祐介さんは、心の奥では私の事を許せないと思っているはずです…でも…もしも許して貰えるのなら…私を…私を貴方の傍に居させて頂けませんでしょうか…」

彼女はすごく真剣に、そして訴えかける様にそう言った。彼女は里美が死んだのを自分のせいだと今も思っている。

しかしそれは彼女のせいじゃない：死神としての役割だっただけ：そして死神である彼女は俺を助けてくれた。

許すとか許さないの前に俺は彼女を憎んでない。

俺は彼女の事が好きだし一緒に暮らしたい：

しかし問題はある：それは自分自身、そう、俺の問題だ：

「俺は：君と一生一緒に暮らす勇気が無い：君が俺の監視するだけなら：別に一緒に暮らさない方がいいんじゃないのか？それが君の為でもあるんじゃないのか？」

俺は一緒に暮らしたいという気持ちを抑えてあえてそう言った。

俺の台詞を聞いた彼女の目には薄っすらと涙が浮かぶ。

そして彼女は涙声で懸命に俺に言った。

「お願いです：ルナは：祐介と一緒に暮らしたいんです：」

そんな彼女を見ているといくら鈍い俺でも彼女の俺に対する愛情、そして覚悟が理解出来た。

だがそれでも俺の奥に潜むもう一人の俺は彼女と一緒に暮らす事を肯定しない。

おい：祐介の傍に居ても彼女は決して幸せにはならないだろ？お前と一緒に暮らすなんて彼女の為にならないだぞ？そんな台詞が聞こえてきた。

「そんな顔をしないで下さい：私は例え人間になったとしても死神です：私は祐介さんの迷惑になるだけの存在です。でも私は：私は祐介さんと一緒に暮らせるだけで幸せなんです！妹としてで、家族としてでも何でもいいです！お傍にだけでも置いてもらえませんか：」

彼女は目から一粒の涙がぽたりと畳に落ちた。

そんな彼女を見て俺は考える。何をしてるんだよ…俺は何をした
いんだよ…

すると俺の心の奥に潜むさっきとは違うもう一人の俺が話しかけ
てくる。

祐介、お前だって彼女の事が好きなんだろう？愛してるんだろ？だ
ったらお前から一緒に居てくれと言えよ…

でも…俺は彼女を幸せに出来る自信は…それにもう一人の俺もき
つと賛成してはいはず…

何を考えてる！もう一人の俺はお前の弱い気持ちだ！打ち破れよ！
お前には彼女が必要なんだよ！彼女もお前が必要なんだよ！わか
んねーのか！

でも里美は…里美には…

大丈夫だ、きつとルナと一緒になるのなら…里美だって許してく
れるよ…

ルナ…そうだ…さっき彼女は言っていた…そうか…彼女の名前は
ルナなんだ…

「名前…ルナって言うのか？」

彼女はハッとした表情で俺を見た。そして小さく頷く。

「名前を教えると…死神では居られないんだよな…」

彼女は小さく頷いた。

「名前を知った人が…祐介さんが死ぬまでは…私は死神に戻れませ
ん…」

ほら祐介…これも彼女の覚悟だぞ…

決めた…俺は彼女と…ルナと一緒に居たい！

俺は大きく深呼吸をすると勇気を出して彼女に言った。

「俺は君の事が好きだ。生きててくれて本気で嬉しかったし、こうして再び逢えてよかった」

「はい…」

「本当に…本当に君が後悔しないのなら…本当にこんな俺でいいのなら…俺の方からお願いしたいんだ…俺と一緒に暮らしてくれないか？俺の人生のパートナーになってくれ！ルナ！」

その瞬間、彼女の目から大粒の涙がボロボロとこぼれ落ちる。

「嬉しいです…私…本当に嬉しい…」

彼女を見て俺は思った。

彼女は今は一人の女性なんだ…今は死神じゃない…俺を必要としてくれている大事な人なんだ…そうだ…彼女は俺が一生守る。

「ルナ…」

「ぐす…はい…」

「俺が死ぬまで…俺がルナを守るからな…」

「…祐介さん！」

ルナは泣きながら俺の胸の中へ向かって飛び込んで来た。

俺は彼女を受け止めると優しくぎゅっと抱きしめた。
やわらかい彼女の感触とそして彼女の暖かいぬくもりが俺に伝わる。

そう、とても暖かい彼女のぬくもりが…

「祐介さん…お願いが…あるんです…」

「お願い？」

「あの…約束して下さい…絶対に…絶対に長生きしてくれるって…」

ルナは涙を流しながら笑顔でそう言った。

まったく…また死神らしからぬ事を言ってる。

「ああ…約束するよ…俺からも一つだけ約束して欲しい…」

「え？私に？」

「ああ…」

「何ですか？」

「一年前みたいな無茶は二度としないでくれ…俺を…悲しませないで欲しい…」

「うん…約束します…一生…貴方を悲しませたりしない…」

俺達は見詰め合った…

そして俺達はゆっくりと唇を重ねた…

終
わ
り

えびろーぐ？（後書き）

死神【ルナ】と高橋祐介との話はこれで一応終わりです。

一応はハッピーエンドという事です！

この他にもうひとつエピソードがありますが正直おまけです。

【L×D×H】の答えは次のエピソード？の最後にあります。

ここまで読んで頂き、誠にありがとうございました。

えびろーぐ？ (前書き)

遂に最後のえびろーぐです。

えびろーぐ？

えびろーぐ？

エピローグ？から13年が経過したある日の出来事。

高橋祐介は死神ルナと一緒に幸せに暮らしていた。

「ねえパパ！」

リビングのソファに座って新聞を読んでいた祐介の元へ一人の女の子がやってくる。

少女の名前は高橋美里。たかはしみさと祐介とルナとの間に生まれた愛娘だ。

え？娘だと！？お前は死神とやっちゃった上に子供まで作ったのかよ！

と、読者の皆様も突っ込みたくなと思います。

結論から言う、『はい、しっかりとやる事はやって子供も二人出来ました』と言う事です。

仕方ありません：祐介だって男なのです。

という事で本編に戻ります。

「何だい？何かパパに用事かな？」

「あのね、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

美里はそう言う俺の横へちょこんと座る。

「ん？聞きたい事？算数の宿題がまた解らないとか？」

「違う！そんなんじゃない！もっと重要な事！」

「重要な事？それって何だい？」

俺はこの時には大した質問なんてして来ないだろう。と簡単に考えていた。

「ええとね…パパはさ…」

「うん？」

「ママとどこでどうやって出会って、どうして一緒になったの？」

「ぶふ！」

美里はいきなり俺の予測もしていなかった質問をしてきた。

「ど、どうしたんだ？いきなり唐突だな」

「だってさ、ママって髪の色は青くて綺麗だし、まあ私も青くて綺麗だけどさ…あとすっごい可愛いし、まあ私も可愛いけどさ…、正直に言うけどさ、パパって男性としてのレベルって中の下くらいじゃない。ママと不釣り合いだと思ってね」

な、なんて事を言うんだ…パパに対して男性として中の下とか酷くないか…

「えっと…美里？パパってそんなにママと不釣り合いかな？」

俺がそう言うのと美里はハツとした表情になる。

「え！あ！えっと！私はパパが好きだよ！パパが普通以下でも私はいいよ！それに私はママとパパが結婚してよかったと思ってるよ？だって私がこんなに可愛く生まれたもん！この青い髪なんて『最高に格好いいね！』って友達に言われるし！弟もすっごく可愛いもん！」

美里は一生懸命にフォローの言葉を羅列する。

「だから大丈夫！パパとママは不釣り合いだけど大丈夫だよ！」

「そ、そっか…ありがとう…」

結局は不釣り合いという結論になるらしい…

子供だから仕方ない…と言う事で収めいいものなのだろうか…

しかし、俺がここでパパはカッコいいだろ！とか言うのも大人げないしな…

取り合えず美里の質問に答えておこうかな…

「そうだね…パパとママは運命の出会いだったんだ。あれは衝撃的で、そして普通じゃ出来ないような出会いだった」

「え？何？それってどういうの？運命的な素敵な出会いって事なの？」

「どうだろう…運命的ではあっても素敵では無かったな…」

「じゃあ、衝撃的っていうのは何？ママの落としたハンカチを拾っ

たのが切っ掛けとか？パパがママを痴漢したのが切っ掛けとか？」

ちょっと待ってくれ…最初のハンカチはいいけど。後の衝撃的
だけど単なる犯罪だろ…

「いや、そうじゃ無くって…何ていうか…うまく説明出来ない…」

俺は答えに困っていると美里は腕を組んで考え始めた。

「そうか…なるほど…説明が出来ない程の衝撃的な出会か…美里も
そういう出会いしたいなあ…出来るかなあ…ねー！パパ！美里も出
来る？」

美里は目を輝かせながら俺を見た。

「え？いや、世間一般的には無理だと思うし、あの出会いはお勧め
出来ないな」

「え！？何で！私だって、格好良くって、優しくって、お金持で、
そして一生尽くしてくれるような旦那様が欲しいもん！」

何という設定の高さだ…何一つ俺に当てはまっていないじゃない
か…いや、まあ優しいってのはあってるかな。

しかしおませさんだな…誰に似たんだこの子は…本当に俺の子な
のか？

もしかして本当は俺の子じゃないんじゃ？うーん…ルナは死神だ
しなあ…

こっそり俺が知らない間に浮気して…

「何の話してるの？」

いきなり後ろからルナの声が聞こえる。

「うわあ！ごめん！嘘です！俺の子です！」

「え？何？どうしたのパパ？」

あ…そ、そうか…声に出してた訳じゃないから聞こえて無いのか…
よかった…冗談にでもあんな事が聞こえたらルナにすごい怒られるだろうからな。

「ママ！ママにも聞くけど、パパとはどういう切っ掛けで出会ったの？正直言ってパパとママって釣り合っていないし！不思議だったんだよね」

まだ言うか…そりゃ俺は格好良くないのは自覚もしている。

しかし…そんなにルナと俺は釣り合っていないのか…実の娘にこんなにガンガン言われるとすごいショックだぞ…

「ママとパパ？そうね…運命の出会いだったかな…多分この世で私達の様な出会いをした人はいないはずよ…ふふ」

ルナは笑顔でそう言った。

「へえ…そっかあ…運命的な出会いかあ…そうなった場合には相手の容姿や年収は関係ないのか…」

「美里、ママと同じ様な出会いは普通は出来ないから、美里は自分を磨いて時間をかけていい人を見つけないかと思うよ」

ルナ：お前：小学校六年生の娘に何を真面目に：

「よし！頑張って自分磨きするね！そしていい男を見つけるぞ！」

おいおい：小学校六年生の台詞じゃないだろ：

「美里、弟の優希の面倒もちゃんと見てあげるのよ？」

「うん！任せて！」

という事で俺とルナは美里と優希という二人の子供に恵まれて幸せな生活を送っています。

読者の皆様もご安心下さい。

「そうだ：ねえパパ」

美里が耳元で囁いてきた。

「ん？」

「パパ、ママに逃げられないようにしなさいよ」

「こ、子供がそんな事を気にするんじゃない！」

「気にするもんん！だって：パパが：ずっと幸せでいてほしいから
…」

「ば、馬鹿：」

終わり

えびろーぐ？（後書き）

いかがだったでしょうか？ちょっと私の小説では別系統な感じですが、本当に最後まで読んで頂きありがとうございました！

最後にタイトルの意味を：【L×D×H】の部分ですが、解った方はいらるかな？この文字列には2つの意味があります。

L∥Love&Lost【愛と失う】

D∥Death&Days【死神と日々】

H∥Human&Happiness【人間と幸せ】

解釈その？【愛】しあう【死神】と【人間】

解釈その？【失った】【日々を】乗り越えて【幸せ】を掴む

という無理矢理な意味です。片方でも解った方はすごいです！

基本は解釈？の方が私は好きですね！という事で：

もしも宜しければ評価もお願い出来れば作者も嬉しいです！（次回作の意欲がw）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5185u/>

俺と彼女のL×D×Hな関係

2011年9月29日03時27分発行